

# 広告



ハウスの中で出荷を待つメロン。写真はIKメロンという赤肉の、とろけるような甘さが特徴のメロンです。



花畔でメロン作り32年の尾田久男さん。



ヘタと反対側のお尻を指で押して、少し軟らかくなっていたら食べごろ。

本格的な夏の訪れとともにスタートするメロンの収穫。石狩では花畔地区や高岡地区、さらには厚田区、浜益区でさまざまな種類のメロンが作られていて、これから最盛期を迎えます。

「石狩でメロンの栽培が始まったのは昭和50年。当時はプリンスメロンが主流で、スイカと一緒に盛んに作られていました」と振り返るのは花畔地区で32年に渡ってメロンを作り続けている尾田久男さん(80)。「メロンはもともと連作に弱く、接ぎ木をして育てる必要があって、これが慣れるまで本当に苦労しました。でも今は接ぎ木の必要がないレッド113も作っていますよ」。

ビニールハウスに足を運ぶと、収穫を間近に控

## とろける甘さ！ 石狩のメロン

え、まるまるとした、きれいな網目のメロンが育っていました。「収穫は葉の色と網目の状態を毎日確認して、見極めていきます。今年は春先の天候不良で少し成長が遅れましたが、6月の猛暑で一気に回復。甘みがたっぷり詰まったおいしいメロンに育ちました」と尾田さんはメロンの出来に自信をのぞかせます。今年の夏はぜひ、完熟した石狩産のメロンを冷やし、その甘さを味わってみてください。



8月末まで収穫の続く石狩産のメロンは、JAいしかり地物市場でも購入できます！

●JAいしかり地物市場 ㊦ 樽川120-3

## 市民図書館10周年を迎え

◎ 石狩随想

47

6月の昼時、このまちに図書館をつくりたいと動いた人々や多くのボランティア、読書を愛好するグループなどが集い、10周年を祝う「おにぎりパーティー」が開かれた。各者のスピーチは市民図書館に深い思いを持つものだった。「図書館」「本」は人を豊かにする肥やしだと改めて思い知った

◆物心つく3歳ころまでに、本に触れる、ないしは本棚のある部屋での空間体験は子どもたちの成長に大きくかわつてくることを実感している方は多いはず。「本」は成長への必然的存在なのだ。活字の無かつた書き写しの時代、音読が普通であった。従つて本を有すること自体、権力の象徴でもあり、いわゆる「読み聞かせ」は時に支配へのツールでもあつた

◆しかしケーテンベルクによる印刷機の発明は、多数の人々に本を読む機会を広げた。次第に黙読が一般化され、さまざまな本を媒体として、価値感の違いを表現することが発達し「情報」が育ち、精神的コミュニティーが誕生した。そのひとつの姿がルネサンスや近代民主主義であつたり、公共空間といった概念を有することにも結びついてきたと言えよう

◆市民図書館は「市民主権」の象徴的存在でありたいと願っている。「図書館の中にまちをつくらう」のコンセプトは、単にぎわいを求めたものでなく、人が生き、成長するための大切な役割を果たしていきたいとの想いでもある。ことも未来館との併設は、可能性をさらに広げることになる。入館者300万人を共に喜びたい。

(市長)